

琉球大学学術リポジトリ

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して：
「寓教於樂」（楽しく教える）ことについて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2021-05-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 維真 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48506

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

— 「寓教於樂」(楽しく教える) ことについて—

グローバル教育支援機構 非常勤講師

張 維真 (「中国語会話」 担当)

実はプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーの受賞は今回で2回目です。1回目は2009年で、夫の海外研修でハワイ滞在中にメールで受賞のご連絡をいただきました。夫の研修中、家族で1年間のハワイ滞在を予定していましたので、授賞式や当時受賞者に課された授業の公開などに対応ができず、非常に残念な思いで辞退したことを、今でもよく覚えています。そして10年後、再度受賞のご連絡をいただき、私にとりましては、まさに光栄の至りです。授業が評価され、とてもうれしく思います。

1、初心の経験を忘れず

私は台湾出身で結婚して日本に住むようになり、今でも琉球大学でネイティブスピーカーの非常勤講師として、初めて中国語の授業を担当した日のことを、よく覚えています。というよりも、正確には、その日のことを絶対に忘れないということを心に刻んでいます。生まれて初

めて大学の教壇に立ち、緊張のあまり震える声で自己紹介をする中で、学生たちも緊張した面持ちで私を見つめていました。事前に何度も自宅でシラバスに準じた模擬授業を行い、しっかり準備して授業に臨んだのですが、慣れない緊張した時間が無情に過ぎていくのを感じました。授業が終わり、自宅に戻り拙い授業を振り返り、無意識に発した言葉に学生が飛びつき、笑い、そして目を輝かした瞬間が何回かあったことを思い出しました。それは模擬授業で準備練習した言葉ではなく、話の展開の中で、その場で思いついた言葉でした。緊張した授業の中で、その言葉を発した瞬間だけは、何か学生たちと心と心が結びつき一体感が持てたような気がしました。私は、今でも、その瞬間のことを忘れないようにしています。私は以後、授業では、そうした学生たちが目を輝かす瞬間を何とか教育上楽しい裨益ある瞬間に変えることができないかと考えるようになりました。私は毎回講義に臨む際は、そうした経験を忘れず、一人一人の学生の心をつかむ授業を目指しています。そして、学生が中国語学習は楽しいと思うような授業形態を創り出すことを第一義に考えています。琉球大学での非常勤講師としての中国語教育ももう20年が過ぎました。初心の経験を忘れず、これからも学生たちに真摯に向かい合い、意義のある教育を実践できればと思っています。

2、学生全員の名前を覚える

私は授業の中で、私自身に絶対やらなければならない条件を課しています。それは学生の名前を覚えるということです。授業では発音のチェックをする際、どうしても学生の名前を呼ば

なければならぬ場合があります。その際、名前が分からず「最後の列の一番右側に座っている方」とか「その黒縁の眼鏡をかけているあなた」とかっていると、どうしても学生は教師に対して距離感を持ってしまい、またそこで変な緊張感も生じてしまいます。私は 40 余名が履修する「中国語基礎」そして約 20 人が履修する「中国語会話」の講義では必ず数回授業をこなした後に、学生全員の名前を覚えるようにしています。その際、学生に抵抗がなければ、その学生の姓ではなく名前を呼ぶようにしています。その方が、学生がより親近感を感じるからです。学生たちが「先生は自分の名前を知っている」「自分を知っている」という気持ちを持ち始めると、クラス全体の雰囲気もよくなり、また全体学習もよりスムーズに展開できると確信しているからです。

3、五到「眼到、耳到、口到、手到、心到」（読む、聞く、話す、書く、達成感）

私はネイティブスピーカーの教師であることを意識して、5つの教育目標を掲げています。その目標は中国語では「五到」といい、それは「眼到（読む）」「耳到（聞く）」「口到（話す）」「手到（書く）」「心到（達成感）」を指しています。ネイティブスピーカーは日常的に中国語を話しているわけですから、そうしたネイティブスピーカーが教える中国語教育を通して、学生たちには教科書の課題のみならず、生活感溢れる中国語を中国や台湾にいる気分で学んでほしいと思っています。実際にネイティブスピーカーの読む中国語を「聞き」、それをまねて「読んで」みる。会話も教科書的な表現以外に実際にはいろいろな実践的な表現法があり、それをネ

イティブスピーカーから学び、自分も会話練習の中で「話し」、正しい発音が出来ているのかをチェックしてもらおう。作文においては中国語を「書いて」みて、それを正しい中国語に添削してもらおう。そうした教育を通して、学生たちには「心から」中国語学習における「達成感」を感じ取ってもらいたいと思っています。

4、教えることと学ぶことの一体感

日本の大学の講義では教師が一方的に話し、学生たちは、それを終わるまでじっと聞いている。そういった講義スタイルが多くみられるように思います。語学教育は学生の読む、聞く、話す、書く力のスキルアップを目指す必要上、教える側の教師と学習する側の学生の一体化が強く求められているように考えています。一体化において重要となるのが学生の積極的な授業参加です。私は授業では単に教科書に記されていることを教えるのではなく、教科書の題材以外にも学生が関心を持ちそうな話題を提供するようにしています。例えば、教科書の本課に現れる食事の場面では、実際に私が台湾社会で体験した夕食時間に親戚が事前にアポなく突然訪問して来た場合でも、台湾では歓迎し夕食を共にすることが普通に行われているといった話をすると、学生は驚く。そして「それは親戚が礼儀を知らない」とか「日本だと急な来客の場合、食事の準備が間に合わない。台湾ではどう対応するんですか」といった質問が、学生から飛び交う。学生のそうした積極的な授業参加により教師と学生との間に一体感が生まれます。当然、中国語の授業ですから、下手でもできる限り、中国語で話してもらいます。出来ない場合はこういった表現方法があるといった形で授業をさらに展開していきます。中国や台湾の文化にも

触れ得る話題を提供し、学生の関心を喚起する中で教え学びあう授業形態を創り出す、講義ではそういった工夫をしています。

5、近い学習目標の設定

学生の中には、将来中国との貿易を展開する商社や旅行会社のツアーコンダクター或いは通訳といった職種につきたいといった願望を持ち、中国語を履修する学生が少なからずいます。このような遠い将来の目標設定も大切ですが、学生たちには、まずは近い目標設定を立てチャレンジするように勧めています。自分の学習段階にあった目標設定をし、それを一つ一つ克服する中で、遠い目標に向かって行ってほしいと考えています。沖縄県でも中国語のスピーチコンテストや朗読コンテスト、中国語検定試験などが毎年行われています。その他に華僑総会の主催する中国語のカラオケ大会などもあります。学生達にはそういったコンテストや検定試験そしてカラオケ大会に果敢にチャレンジしてほしいと思っています。授業で学んだ中国語の力をまずは、そういった身の丈にあった近い目標設定の中で試し、中国語学習に対するさらなる意欲を高め、自信をつけていってほしいと考えています。

6、「寓教於樂」(楽しく教える) ことについての意義

私は「寓教於樂」(楽しく教える)ということをして座右の銘としています。娘が高三の時、授業中、多くの生徒の私語が目立ち、中には寝ていた生徒もいたことから、先生に怒られたといい、

娘は、これは単に学生の側に問題があるのではなく、そういった生徒が関心を示さない授業をする先生にも問題があると言ったことを、忘れないようにしています。「教育」というのは教えるという意味だということを、いつも肝に銘じています。一方的に教え込む教育は、かえって学生のやる気をなくしてしまうことがあります。語学の修得には恒常的な学習が求められています。単調な授業に陥らないよう、学生が楽しく感じる授業の工夫を常に怠らないように心がけています。そうした中で学生たちがしっかり育っていくことを願っています。

7、最後に

2020年4月、前期の授業が始まり、また学生たちと新たな出会いがあることを期待していた折に、新型コロナの感染拡大で、授業が対面からパソコンを利用した遠隔授業に変更され、私自身インターネット関連の情報には疎いことから大変困ってしまいました。しかし、これもコロナ時代の新たな教育方法の一環だと気持ちを入れ替え、ゼロから microsoft teams の使用方法を学び、学生たちとパソコンの画面を通して相互に認識しあい、何とか授業を進めることが出来ました。そうした授業を行う中で、teams の良さも理解することが出来ました。授業を行う前に事前に授業のポイントを押さえる動画を作成し、webclass を通して学生らに発信し、授業を受ける学生には事前に予習をお願いしたところ、講義内容に対する学生の理解度がより高まることを発見しました。またそれに対する質問が webclass やメールで届くようになり、今は授業以外にも学生たちと接する機会が増えています。

そうしたメールは前期の授業が終了した現在も続き、学生たちの関心の高さに驚いています。これまでの対面授業では、学生とのつながりは授業が終了するとほとんど途絶えてしまいましたが、学生たちのそうした反応も教育効果の表れだと思い、彼らの質問には丁寧に答え、アドバイスをするようにしています。こうしたコロナ対策でおこなった遠隔授業で新たに得た成果も、今後の学生たちの学習に生かしていきたいと考えています。

今回、授業に対する私自身の取り組みを紹介する機会を与えていただき、併せて感謝申し上げます。